

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史資料の収集と研究を続けている公文教育研究会。

広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



江戸の双六にみる 寺子屋のイベント

何かと慌ただしい年末ですが、年が明ければお正月でひと段落。家族でのんびりとお正月の遊びを楽しむのもよいですね。今回ご紹介するのは、お正月遊びの定番である双六。左の浮世絵のタイトルを現代語訳すると、「新春・がんばれ！ 寺子屋双六」といったところでしょうか。今

日はこの双六を見ながら、寺子屋のイベントをご紹介します。

双六のスタートは下段中央の「振出し」で、「寺子入いろは」とあります。「寺子入」とは寺子屋に入門すること。母親に手を引かれて入門する小さな子どもは、礼儀正しく羽織袴の正装です。入門すると、まずは「いろは」の練習からスタート。ひらがなを一通りマスターした後は、家の職業や性別、個人の能力に合わせて、勉強する内容は人それぞれ。中三段に並んでいるの

は代表的な往來物（教科書）のタイトルです。

そして上段中央、学問の神様・亀戸天神が描かれているのが「上り」のコマ。その左右は、寺子屋のお楽しみイベントのコマです。右上は「褒美」、左上は「席書」と書いてあります。席書とは寺子屋の成果発表会のこと。子どもたちは、席書で日頃練習してきた書を近所の人たちに披露した後、用意されたごちそうを食べることができました。

一方、サイコロの出目が悪いと、

下段左右にあるお仕置きのコマに飛ばされます。右下のコマは「はもん」（ハ破門）ということのでゲームオーバー。そして左下、叱られた子どもが机の上に正座させられているのは、「留られ」というお休みのコマです。そこには「画工・版元の詫にて元座へ返る」という説明があります。これは「サイコロで1が出たら、この双六を描いた絵師と印刷・販売した版元が、あなたに代わって師匠に謝り、元のコマに戻るができる」という意味。実際の寺子屋でも、子どもが悪さをして師匠に叱られると、近所の「あやまり役」の大人が寺子屋にやって来て、子どもと一緒に師匠に謝ってくれたのだそうです。寺子屋では、師匠と地域の大人たちが協力して子どもを見守り、育てていたのです。



春興手習出精双六

歌川広重 弘化3年（1846）

寺子屋をテーマとした双六で、下段中央の「振出し」から上段中央の「上り」をめざす。上段と下段のコマは寺子屋でのイベント、中3段が学習内容で、特に中央1段は女子のみが学ぶ内容だ。絵師は歌川広重。広重は「名所江戸百景」などの風景画で有名だが、大変愛らしい子どもを描く絵師でもある。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note